資料６　「砂糖菓子の小さな家」

カロリーネ・シュタール『子供のための寓話と昔話』1821 年

,Das Häuschen von Zuckerwerk‘　Karoline Stahl

訳：岡部由紀子

二人の子供が森で道に迷い、空腹と疲れで死にそうになった。そのとき、かれらの目に小さな家がとびこんできた。**なんとうれしいことに、その家はお菓子でできていた。屋根瓦の代わりに、アーモンドのついたレープクーヘンが葺いてあったし、扉や窓の鎧戸はおおきな茶色いレープクーヘンでできていた。**すぐにかれらはご馳走にあずかり、壁をたくさんかじり取ることはできなかったので、屋根に登り、瓦を食べ始めた。

しかし、この小さな家には性悪で人食いの魔女が住んでいた。魔女は物音に気付き、何事かと外にでてきた。子ども達はうまく隠れたが、空腹と瓦のお菓子の魅力がかれらを何度もその家へと誘ったので、とうとう冷酷な魔女につかまってしまった。そうか、お前たちがずっとあたしの家を食べていたんだね。今度はあたしがお前たちを食べる番だ。グレートヒェンとフリッツは、勘弁してくれるように頼んだが無駄だった。かれらは家の中に連れ込まれた。

グレートヒェンは、私達はやせっぽちなの、魔女のおばさん、太るまでもう少し生かしておいてと、頼んだ。それもそうだ、いい考えだと老婆はいい、彼ら二人を小さな部屋に閉じこめ、干しぶどうとアーモンドを与えた。ある日、魔女はグレートヒェンに、部屋の小窓から指を出すようにいった。もう十分肥えたかを確かめようとしたのだ。急いでグレートヒェンは小さな木ぎれを突き出した。老婆はそれを咬み、まだひどく痩せていると思った。そうして何日かが過ぎ、グレートヒェンは毎回同じやり方で老婆をだました。

ある時、魔女はフリッツに指を出すようにいったが、フリッツは拒んだ。なんてことだ、もう十分太ったはずだ、出て来るんだ、窯は熱くなっていると魔女は叫んで、かわいそうな干しぶどうとアーモンド（でふっくらした）子ども達を、殺そうと引っ張り出した。

お前たちパンスコップの上に座りな、窯に押し込むからと命じた。魔女のおばさん、いったいどうやるのか、見せてちょうだいと、グレートヒェンは頼んだ。**老婆はパンフォークの上に座ってみせた。急いで子ども達はパンスコップをにぎり、人食い女を窯に押し込んだ。**魔女は焼け死んで、子ども達は、すてきな砂糖でできた小さな家を、まるごと自分たちのものにしたとさ。

Karoline Stahl: Fabeln, Mährchen und Erzählungen für Kinder Nürnberg 1821, S. 92-94.

http://www.zeno.org/nid/20005708982